

誤用から学習へ：格助詞学習におけるメタ言語フィードバックの影響

宮林賀奈子（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院〈SOAS〉）

格助詞における日本語学習者の誤用の特徴や原因は様々な点から理解されてきているが、その誤用から学習へ繋げるために効果的な誤用への対応に関しては明らかでない。

先行研究（例 Nagata & Swisher, 1995）はメタ言語フィードバック（以下、メタ言語 FB）としてメタ言語情報を与えることが効果的な対応であるとテスト結果から示している。だが、メタ言語 FB の自己修正を促す面の影響については、メタ言語情報と共に正用格助詞も与えられたために、不明である。訂正フィードバック（以下、CF）の効果を判断する1つの指標として CF 提供後の学習者の誤用修正率が調査されているが、メタ言語 FB が導いた修正率に一律な傾向は見られない。他の種類の CF より高いとの報告がある一方で（例 諸石 2001）、他の CF より低く、場合によっては 0%との報告もある（例 畑佐・藤原 2012）。それゆえ一概に修正率だけでメタ言語 FB の効果の有無は判断できない。加えて、テストの点数や修正率といった量的データだけで学習者への影響を十分に理解できない。

そのため、本研究は格助詞学習におけるメタ言語 FB の影響の理解を深めるために、自己修正を促すメタ言語 FB の影響を量的データと質的データの両者から調べた。計 13 週間の調査期間に、参加者の初級学習者 4 人は個別会話セッションに毎週 1 回・計 5 回参加し、対象格助詞の場所格「で」「に」「へ」の誤用にメタ言語 FB を受けた。量的データは、事前・事後・遅延事後テストとして実施した絵の描写タスクと誘出模倣テストから集められた。質的データは、ラーニングジャーナル、リフレクションシート、メールでの追加質問、アンケート、そしてインタビューから収集され、また会話セッション内の発話行動も観察された。

量的調査の結果、参加者全員の対象格助詞の使い方に改善が見られた。個人により改善点や程度は様々だが、顕著な場合は正用率が 0%から 100%に改善された。質的調査でも肯定的な影響が観察された。事前テスト時や会話セッション期間中に自分の格助詞の理解に確信のなさや自身の中間言語のルールに基づく理解を表した者も事後テスト時には理解を深めていた。セッション期間中、メタ言語 FB 提供後に学習者が自分の使用格助詞と適切な格助詞の相違に気づいたことを示唆する様々な発話行動や報告が見られたことから、自己修正する中で、この相違への気づきが生まれ、そしてこの気づきが学習に繋がったと考える。

参加者人数を増やし、他の CF 群や統制群との比較を用いた更なる検証が必要だが、本調査ではテストからの量的データに加えて、先行研究では調査されなかった質的な面からも自己修正を促すメタ言語 FB が格助詞学習に肯定的な影響をもたらすことが示された。

畑佐由紀子・藤原ゆかり（2012）「外国語としての日本語授業における訂正フィードバックの効果」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 61 号 229-237.

諸石万里子（2001）「日本語教師の言い直しの使用の考察」南雅彦・アラム佐々木幸子（編）『言語学と日本語教育 II』くろしお出版 237-252.

Nagata, N., & Swisher, M. V. (1995). A study of consciousness-raising by computer: The effect of metalinguistic feedback on second language learning. *Foreign Language Annals*, 28(3), 337-347.